

紀 要

第 22 号

2009.3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

大津市域における近世の石工たち

田井中 洋 介

1. はじめに

筆者はこれまで、石燈籠などの石造物に残された刻銘などを手がかりに、近江の地で江戸時代に活動していた石工について検討を加えてきた⁽¹⁾。その中で述べたことがあるが、現在の行政区分では大津市に含まれる旧志賀町域、すなわち滋賀郡北部は、近世における近江の石工を考える上で極めて重要な地域であり、当該地域の石工を抜きにしては、近江の石工の全容を語ることはできない。また、現在では市街地化している石場付近や、市域東南部の旧栗太郡田上地域の石工についても、比較的多くの資料を目にすることができるのであり、本稿で現大津市域に居住していた石工たちについての資料を紹介しておくことは、近江の石工を論じるための基礎資料として、意義のあることと考える。

とはいえ、現時点では筆者が実見して銘文等を確認済みである大津市域の近世石造物は、全体のごく一部にとどまっており、当該地域の石工たちの生産活動の実態について、その全容を語れるだけの十分な資料調査を行ったとは言えない段階ではあるが、管見に触れた資料を紹介しながら、現在の津市域に相当する地域に居住し、石造物等の製作を行っていた江戸時代の石工たちについて概観を試みたい。

2. 『近江輿地志略』にみる大津市域の石工たち

石造物の刻銘資料を紹介する前に、江戸時代中期である享保十九年(1734)に膳所藩士寒川辰清が上梓した地誌である『近江輿地志略』の中から、現大津市域の石工に関連しそうな記述を見ておきたい⁽²⁾。

志賀郡の「穴太村」の項には、「此村の土人、石垣を築くに名ある事土産門に出だす」とある。さらに「土産」の部を見てみると「穴太石垣築」という項が設けられており、「穴太村の土人石垣を築く事に巧手也、故に今石垣築を呼んで穴太といふは之によれり。」と記されている。

「穴太村」の石工については、管見では近世の石造物にその刻銘が確認された事例を知らない。このため、穴太村の石工について言及する資料を、筆者はまったく持ち合わせていないのであるが、近隣の比叡辻村に所在する聖衆来迎寺の石垣修築が、天保十一年(1840)と安政五年(1858)に穴太村の隣村である高畑村の宇兵衛を頭取として行われたという「来迎寺年代記」の記事が知られており、江戸時代後期の穴太地域に石垣普請の職人がいたことは確実である⁽³⁾。ただし、天保十一年の記事に「石ハ木戸喜左衛門取持」とある点には注目しておきたい。

同じく「土産」の「志賀郡之部」の中には「庭石」の項が立てられ、「木戸村の出す所を可とす」とある。木戸村をはじめとする滋賀郡北部の村々については、江戸時代中期以降に多くの石工たちが居住し、石造物などの製作が盛んに行われていたことが刻銘資料等から確認できるのであるが、この点については次章で述べる。

また、志賀郡の「石場」の項には、「相傳中古、石工此地に多く在住して、此濱邊に石を積みおける故の名なりと、今わづか纔に石工一兩軒あり。」と記されている。石場という地名の由来を示すために石工に言及しているものであるが、江戸時代中期の時点において、石工が現に居住していたという事実が確認できる。この石場の石工については、第4章で述べることにしたい。

3. 滋賀郡北部(旧志賀町域)の石工たち

明治十三年(1880)にまとめられた『滋賀県物産誌』には、県内の各町村における農・工・商の軒数や特産物などが記録されている⁽⁴⁾。明治時代の資料であるとはいえ、産業革命によって生産流通体制に大きな変化が生じる以前の記録であり、江戸時代後期の様相を類推する手がかりになるものである。ただし、『滋賀県物産誌』の記述は、たとえば長浜町のような戸数の多い町については「百般ノ工業ヲナセリ」と「工」の業種の内訳がまったく不明な場合もあって、滋賀県内の石工を網羅的に記録している訳ではない点には留意しておく必要がある。

『滋賀県物産誌』の石工に関する記述の中で特筆すべきは、滋賀郡北部の状況である。この地域では「木戸村」の項に特産物として「石燈籠」「石塔」などが挙げられているなど、石工の分布密度は他地域に比べて圧倒的である。木戸村・北比良村では戸数の中において「工」の占める比率も高く、明治時代初めにおける滋賀県の石工の分布状況として、この地域が特筆されるべき状況であったことは疑いない。

江戸時代の石造物の刻銘等の資料を見ても、当該地域の優位性を窺い知ることができる。管見に触れた資料を表1に記したが、その中で比較的好く知られている資料として、『雲根志』などを著した木内石亭が郷里の大津市幸神社に、文化二年(1805)に奉納した石燈籠の「荒川村石工 今井丈左衛門」という刻銘がある。

滋賀郡から琵琶湖を隔てた湖東地域においても、東近江市五個荘川並町の観音正寺への登山口に建てられている常夜燈に「石工 南比良 孫吉」という刻銘があり、「享保二十乙卯歳(1735)正月」という紀年は、近江における石

工銘資料としては、比較的早い段階のものである。この「孫吉」は、享保十五年（1730）に八幡堀の石垣が築き直された際の施工業者としても「石屋比良ノ孫吉」として名前が見える⁽⁵⁾。また、『近江神崎郡志稿』には、寛政五年（1793）に滋賀郡南比良村の「石や七右衛門」が、東近江市五個荘金堂町の大城神社の石鳥居再建を請け負ったことが記録されている⁽⁶⁾。

湖北地域でも、安永十年（1781）に「志賀郡荒河村 石屋 嘉右衛門」が長浜市早崎所在の竹生島一の鳥居の注文を受けたことが、竹生島宝厳寺文書から確認できる⁽⁷⁾。なお、居住地が明示されていない刻銘資料であるが、野洲市三上山中腹の妙見宮跡地に残る文化六年（1809）建立の石燈籠に刻銘のある「石工 志賀郡 嘉右衛門」や、大津市建部大社の文政九年（1826）建立の石燈籠に刻銘された「石工 嘉右衛門」も、同一人物もしくはその家系に連なる石工である可能性がある。

また、明治時代に下る資料では、野洲市永原の朝鮮人街道沿いにある「明治十三年（1880）九月」建立の大神宮常夜燈に「製造人 西江州木戸村 仁科小兵エ」と刻銘された事例などが挙げられる。

これらの資料から、少なくとも江戸時代中期以降には、滋賀郡北部は石造物の製作において近江を代表する存在であり、石鳥居のような大規模な製品を中心に、琵琶湖を隔てた遠隔地の村々からも、この地域の石工に発注すること

が多かったものと考えられるのである。

なお、江戸時代に東海道の京・大津間に敷設された車石については、文化二年（1805）の工事に際して、主として木戸石が使用され、これにかかわった人物として「南小松村治郎吉」と「木戸村嘉左衛門」が連名で石運送に関する請状を提出したことが紹介されている⁽⁸⁾。また、日野町大窪に所在する南山王日枝神社には、豪商として著名な「京都 中井良祐光武季子 中井正治石門橋武成」が寄進した「文化十二年（1815）乙亥三月建」の石燈籠に「斯奇石所出江州志賀郡南船路村獲之以造 京都石工近江屋久兵衛」と刻まれた例もあり、京都の石工が滋賀郡北部で石材を得たケースがあったことが分かる。

以上のように、滋賀郡北部は「木戸石」に代表される良質な花崗岩産地として、近世における石造物の一大産地だったのである⁽⁹⁾。

4. 「石場」の石工とその周辺

江戸時代には松本村に含まれる存在であった「石場」の石工については、筆者が以前に近江の近世石工について概観した時点では、『近江輿地志略』の記事は知られているものの、刻銘や文書資料によって具体的にその作例を確認できる事例を未見であった⁽¹⁰⁾。しかしながら、近年刊行された『石山寺の古建築』において、石山寺宝蔵の文化五年（1808）建立板札に記された「石細工 石場住 小松屋久

	旧志賀町域	穴太地域	大津・石場	田上地域
1700	享保15(1730)八幡堀石垣修築(文書資料) 「石屋比良ノ孫吉」 享保19(1734)近江輿地志略 「庭石 木戸村の出ず所を可とす」 享保20(1735)東近江市五個荘川並町常夜燈 「石工 南比良 孫吉」 延享2(1745)草津市小槻大社鳥居(文書資料) 「石屋 比良荒川村住 浅右衛門」 安永10(1781)長浜市早崎鳥居(文書資料) 「志賀郡荒河村 石屋 嘉右衛門」	享保19(1734)近江輿地志略 「穴太石垣築」	享保19(1734)近江輿地志略 「今纏に石工一両軒あり」 宝暦3(1753)草津市新宮神社石燈籠 「石場 作人市兵衛」	
1800	文化2(1805)大津市幸神社石燈籠 「荒川村石工 今井文左衛門」 文化8(1809)野洲市三上妙見宮跡石燈籠 「志賀郡 石工 嘉右衛門」 天保13(1842)高島市勝野日吉神社狛犬 「作人 木戸宿 石工小兵エ」 安政2(1856)高島市三尾里真島神社カマド 「石工木戸與(?)兵衛」	天保11(1840)来迎寺年代記 「表石垣新古様上(中略)頭取高畑村宇兵」 安政5(1858)来迎寺年代記 「大庵石垣修葺、高畑宇兵衛手始候事」	文化5(1808)大津市石山寺宝蔵板札 「石細工 石場住 小松屋久助」 文化5(1808)大津市小舟入常夜燈 「石工 池田屋嘉七」 文政7(1824)大津市若宮八幡神社石燈籠 「石工 嘉七」 天保14(1843)京都市北野天満宮石燈籠 「大津石工 近江屋源兵衛」 弘化2(1845)大津市石場常夜燈 「石工棟築 近江屋源兵衛 肝藏市治郎」 文久? 大津市平野神社手洗鉢 「石工 市郎兵衛」 慶應2(1866)大津市和田神社狛犬 「石工 嘉七」	寛政12(1800)大津市唐橋東詰道標 「石工 田上 森村 治兵衛」 文化14(1817)草津市龍門八幡神社棟札 「田上森村住 石屋治兵衛」 文政7(1824)大津市石山寺石燈籠 「石工 市右衛門」 文政8(1825)草津市新宮神社石燈籠 「中ノ 石工増兵衛」 文政9(1826)大津市石山寺石 「羽栗色 石工市右工門」
	明治13(1880)野洲市永原常夜燈 「製造人 西江州木戸村 仁科小兵工」 明治13(1880)滋賀県物産誌 多くの村に石工居住の記述あり 明治25(1892)近江八幡市牧町五社神社石燈籠 「木戸石工 仁科小兵衛」		明治13(1880)滋賀県物産誌 大津に石工居住の記述あり 明治34(1901)草津市龍宮神社狛犬 「大ツ石場 石工市市」 明治38(1905)大津市石山寺石碑 「大津市石場 築刻 奥村利三郎」	明治4(1871)大津市荒戸神社石燈籠 「羽栗 石工市右工門」 明治13(1880)滋賀県物産誌 羽栗村に石工居住の記述あり 明治13(1890)大津市唐橋東詰常夜燈 「石工浅川嘉久松」 明治25(1893)大津市田上枝天満宮狛犬 「石工 浅川嘉久松」 明治38(1905)草津市龍宮神社石燈籠 「石工 森村 浅川嘉久松」
1900	明治34(1901)大津市真野神田神社社号標 「木戸村 石工 中村五郎兵工」			

表1 大津市域の石工資料年表

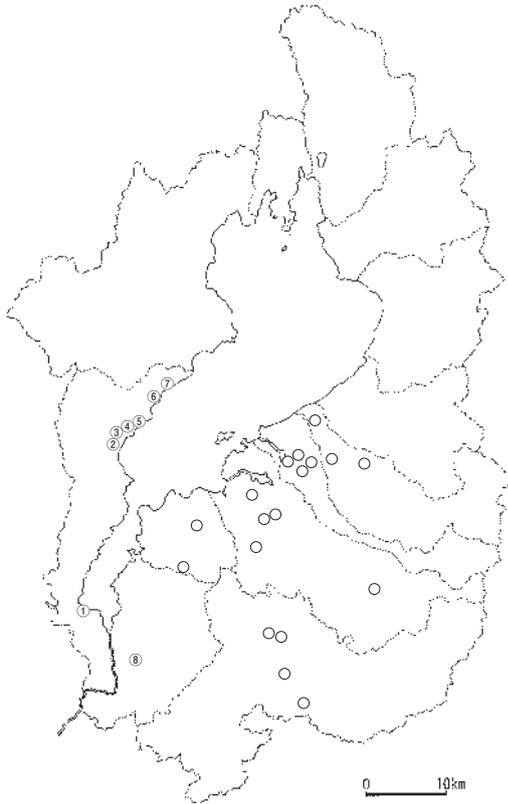


図1 『滋賀県物産誌』に石工等の居住が確認できる集落の分布 (①～⑧は表2に対応)

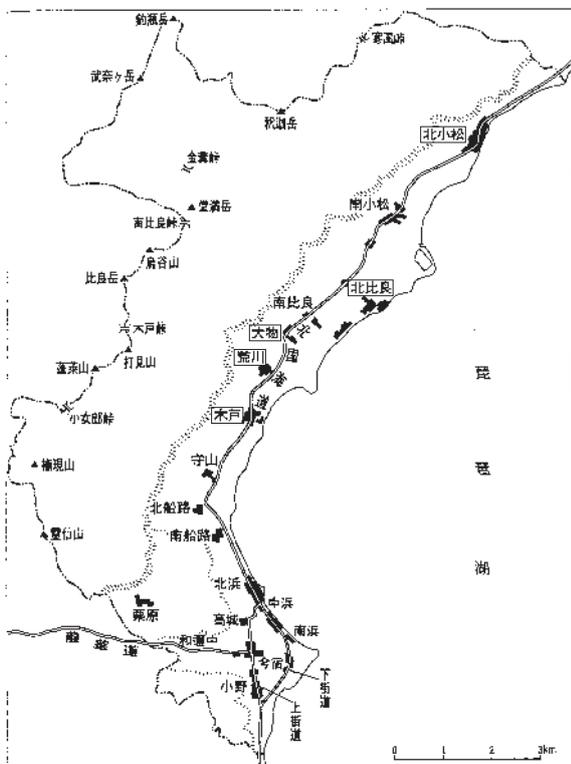


図2 旧志賀町域の村々 (註9文献を改変)
 □が、『滋賀県物産誌』に石工居住の記録がある村

表2 『滋賀県物産誌』に見える石工等が居住していた大津市域の集落一覧 (『滋賀県市町村沿革史』第五巻に基づいて作成)

滋賀郡	粟太郡
①大津街九一ヶ町 農 一五〇軒 人戸 五二八〇軒 ②木戸村 農 一七〇軒 工 八四八軒 (大工木挽石工鍛工等ニテ傍ラ商業ヲ兼ルモノアリ)、商 二七〇二軒、雑 一六八〇軒 (農業上産物に石燈籠・石塔等の記載あり) (石工或ハ大工等ナリ)、商 一四軒 ③荒川村 農 四七軒 工 四九軒 (農業上産物に礎石・野面石の記載あり) (傍ラ製茶養蚕石上大工治工其他雑商及ヒ百貨運輸ヲ事トスルモノアリテ各異ナレリ) ④大物村 農 四六軒 工 五三軒 (傍ラ石工或ハ雑商並ニ物貨運送其他樵夫等ヲ事トスルモノアリテ各異ナレリ) ⑤北比良村 農 五三軒 工 一三六軒 (農業上産物に割石の記載あり) (石工或ハ大工木挽等ナリ)、商 二二軒 ⑥北小松村 農 七八軒 工 九七軒 (石工或ハ大工木挽等ナリ)、商 二二軒 ⑦鵜川村 農 四三軒 工 四七軒 (傍ラ木挽大工石上等ヲ事トスルアリ) ⑧羽栗村 農 六三軒 人戸 六三軒 (傍ラ製茶及ヒ炭焼採薪ヲ事トスルアリ或ハ石工ヲ業トス)	⑧羽栗村 農 六三軒 人戸 六三軒 (傍ラ製茶及ヒ炭焼採薪ヲ事トスルアリ或ハ石工ヲ業トス)

助」と、石山寺境内の明治三十八年(1905)石碑にある「大津市石場 鑄刻 奥村利三郎」という2例が紹介された¹¹⁾。また、愛荘町史編纂事業にともなう文書資料調査の中で、正徳三年(1713)に石場の石工に、石燈籠が発注された記録が確認されている¹²⁾。

これらの新出資料に刺激を受け、筆者が改めて大津市周辺の石造物を調査してみたところ、草津市野路町所在の新宮神社において、宝暦三年(1753)建立の石燈籠に「石場 作人市兵衛」と刻銘がある事例を確認できた。また、石場に隣接する大津市松本に所在する平野神社の宝暦甲戌年(1754)建立の石燈籠には「作人市兵衛」とあり、これも同一人物である可能性が高いと考えられる。また、大きく時代は下るが、草津市新浜町龍宮神社の明治三十四年(1901)の狛犬に「大ツ石場 石工石市」とあるのも、同一系譜に属する石工であるのかもしれない。江戸時代には対岸の草津市矢橋と結ぶ渡船場として賑わった石場の石工の作例が、琵琶湖を隔てた草津市域において見られることは興味深い。

ところで、現在の天津警察署付近の打出浜に建てられていた弘化二年(1845)建設の大常夜燈(通称「石場の常夜燈」)は、現在はびわ湖ホール西のなぎさ公園内に移設されて残されている。この常夜燈の基壇部分には、発起人である「鍵屋傳兵衛 船持中」をはじめ多くの人名等が刻まれているが、その中に「石工棟梁 近江屋源兵衛 肝煎市治郎」と製作に関わった石工の銘も読みとれる。石工の居住地が明示されていないが、この明示されていないという事実から、石場の地から遠くない場所に居住していた石工であることが推定される。

実は、この「近江屋源兵衛」の居住地については、京都市北野天満宮境内に建てられた「天保十四年(1843)癸卯九月」銘の石燈籠に「大津石工 近江屋源兵衛」と刻まれた資料によって、確認することができる¹³⁾。「大津梅寿講」が奉納したこの石燈籠には、講のメンバーと考えられる多くの町人たちの名前が刻まれているが、その中にも「近江屋源兵衛」の名前がみられる。『大津市志』に記されている安政元年(1854)の冥加金上納者の中に名前が見える「近江屋源兵衛」も、おそらく同一人物と考えてよいであろう¹⁴⁾。これらの資料から「近江屋源兵衛」は、大津に居住する町人のひとりであったことが分かるのである。

石場の常夜燈の現在地から西へ約400mの地点に位置する大津市指定文化財「小舟入の常夜燈」は、石場の常夜燈よりも先行する文化五年(1808)の建立であるが、こちらには「石工 池田屋嘉七」銘が確認できる。この「池田屋嘉七」については、これまで他の作例は知られておらず、建立者が「京都恒(常)講」であり、京都の町人も多く名前を連ねていることから、地元の石工ではない可能性も考えられたが、筆者が改めて周辺の寺社に存在する石造物の刻銘を調査してみたところ、逢坂一丁目の若宮八幡神社境内の

文政七年(1824)建立の石燈籠や、木下町に所在する和田神社の慶應二年(1866)の狛犬に「石工 嘉七」銘の類例があり、これらの資料にも居住地の明示はないものの、近隣に居住する石工であったと推定して間違いないと考えるに至った。

以上のように、石場とその周辺には江戸時代に石工が居住し、よく知られている「石場の常夜燈」や「小舟入の常夜燈」は、近隣地域に居住する石工がその製作にあたったものであることを確認することができた。

ところで、江戸時代の石場には瓦職人が居住しており、その中には膳所藩御用達の瓦師であった「清水九太夫」もいたことが、大津市内やその周辺地域に残された瓦の刻銘等によって確認されている¹⁵⁾。江戸時代における近江の石工は、石材産地に居住地を構える場合が多いのに対して、石材産地ではない石場に居住していた石工は、瓦職人と同様に膳所城下あるいは大津宿といった都市における需要に答えるべき存在として活躍した「都市居住型」の石工であったと位置づけることができよう。

5. ^{たなかみ}田上地域の石工たち

上記のほか、『近江輿地志略』には記述がないが、現在の大津市域に居住していた石工として、栗太郡田上地域の石工たちについても取り上げておきたい。

『滋賀県物産誌』には、栗太郡羽栗村の項に「農 六三軒(傍ラ製茶及ヒ炭焼採薪ヲ事トスルアリ或ハ石工ヲ業トス)」と、兼業農家であった石工について記載がある。刻銘資料では、「文政九丙戌(1826)八月」に「羽栗邑 石工市右エ門」が石山寺境内の敷石を施工したことが確認でき、同じく石山寺門前の「文政七甲申年八月十八日」銘の石燈籠に銘のある「石工 市右衛門」も同一人物であろうと考えられる。時代は下るが、大津市田上地域の中野に所在する荒戸神社境内の明治四年(1871)建立の石燈籠にも「羽栗 石工市右エ門」と刻まれたものがあり、石山寺に作例を残した「市右衛門」の子孫によるものであろう。

この羽栗村の石工のほかにも、東海道の唐橋東詰に存在する寛政十二年(1800)銘の道標に見られる「田上 治兵衛」の事例が早くから知られている¹⁶⁾。この「治兵衛」は、『近江栗太郡志』で紹介されている文化十四年(1817)の龍門村八幡神社棟札に「田上森村住 石屋治兵衛」という資料があることから、羽栗村の西に接する森村の石工であったことが分かる¹⁷⁾。

ところで、この道標と同じ交差点の北西角にある明治十三年(1880)建立の常夜燈には「石工浅川喜久松」という刻銘がある。草津市新浜町の龍宮神社の明治三十九年に建てられた石燈籠には、同一人物と考えられる「石工 森村 浅川喜久松」という刻銘があり、この「浅川喜久松」は「治兵衛」からやや時代は下るが、同じ森村の石工であったことが確認できる。「浅川喜久松」の作例は、ほかにも

田上枝天満宮にある明治二十六年の狛犬の「石工 浅川喜久松」銘や、年代不明ながら石山南郷町の立木観音の石段の柵に「モリ村 石工喜久松」と刻まれた例を確認している。

また、東海道から草津市野路町の新宮神社への参道に建てられた文政八年（1825）建立の石燈籠には「中ノ 石工増兵衛」という石工銘があり、この「中ノ」も田上地域のの中野村を指すものと考えられる。

以上のように、『滋賀県物産誌』に石工の居住が記録されている「羽栗村」のほかにも、花崗岩産出地域である田上地域には、江戸時代後期から明治時代にかけて、いくつかの村に石工が居住していたことが刻銘資料等から確認できるのである。

6. まとめにかえて

以上、現在の津市域に居住していた石工たちについて、主として石造物の刻銘を資料として、大きく3地域にまとめて紹介してきた。最初に述べたとおり、筆者が実際に訪れて刻銘を確認済みの石造物は、津市内に数多く存在する資料のごく一部に過ぎない。そして、本稿で紹介した刻銘資料は、大半がこれまで紹介されていなかったものであることから推定すれば、未発見の刻銘資料は今回紹介した資料の何倍にも上ることは疑いない。現在の調査状況を発掘調査に例えていえば、遺跡のごく一部を試掘調査したにすぎない段階であり、津市域で活躍していた石工たちの状況について、全体像を正しくイメージできているかどうか不安な部分もある。本稿を読まれた方々が、身近な場所にある石造物を確認されて、新たな刻銘資料を発見される機会があれば、ご教示いただければ幸いである。

(たいなか ようすけ)

註

- (1) a. 田井中洋介「伊勢国千種村の石工忠右衛門の銘を持つ近江所在の石灯籠二例」『滋賀県地方史研究』第15号 2005
- b. 田井中洋介「石造品の刻銘」『近江八幡の歴史』第二巻 近江八幡市 2006
- c. 田井中洋介「湖東地域の石工に関する研究ノート—愛知川町域に所在する二例の石工銘から—」『滋賀県地方史研究』第16号 2006
- d. 田井中洋介「近世後期における近江の石工についての研究ノート—蒲生郡七里村の石工「金三郎」とその周辺—」『考古学論究』小笠原好彦先生退任記念論集刊行会 2007
- e. 田井中洋介「近江八幡の石工「西川與左衛門」とその周辺」『淡海文化財論叢 第二輯』淡海文化財論叢刊行会 2007
- f. 田井中洋介「近江の石工たち—江戸時代後期を中心に—」『紀要』第15号 滋賀県立安土城考古博物館 2007
- g. 田井中洋介「甲賀の石工についての研究ノート」『紀要』第16号 滋賀県立安土城考古博物館 2008

- (2) 寒川辰清『近江輿地志略』（宇野健一『新註近江輿地志略全』弘文堂書店 1976）
- (3) 杉江 進「公儀「穴太頭」と諸藩「穴生役」」『日本歴史』第717号 吉川弘文館 2008
- (4) 『滋賀県市町村沿革史』第五巻 滋賀県市町村沿革史編さん委員会 1962
- (5) 福尾猛市郎『滋賀縣八幡町史』蒲生郡八幡町 1940
- (6) 大橋金造『近江神崎郡志稿』下巻 滋賀県神崎郡教育会 1928
- (7) 早崎観縁「竹生嶋一の鳥居の建立について」『滋賀県地方史研究紀要』第13号 滋賀県地方史研究家連絡会 1988
- (8) 樋爪 修「京津間の車石敷設工事」『大津市歴史博物館 研究紀要1』1993
- (9) 『志賀町史』第二巻（樋爪 修・杉江 進ほか 滋賀県志賀町 1999）には、旧志賀町域に江戸時代に居住していた石工について、地元区有文書等に基づく記述があり、すでに江戸時代前期には石の切り出しが行われていたことなどが確認できる。町史編纂事業で調査された地元の文書資料を活用して、刻銘資料と総合的に研究を行えば、当該地域の石工について、より具体的に明らかにできるものと考えられる。
- (10) 註 (1) 文献 f
- (11) 『石山寺の古建築』大本山石山寺 2006
- (12) 愛荘町立歴史文化博物館長 門脇正人氏の御教示を受け、町史編纂室の皆様のご厚意によって資料を確認させていただいた。具体的な資料の内容については、機会を改めて紹介したい。
- (13) 佐野精一「近世・京石工の系譜」『日本の石仏』8号 1978
- (14) 『大津市志』上巻 大津市私立教育会 1911
- (15) 樋爪 修・青山 均『かわら一瓦からみた大津史—』大津市歴史博物館 2008
- (16) 木村至宏『近江の道標』（民俗文化研究会 1971）。なお、この文献には石工銘を「石工 京白川 太郎右衛門 田上 治兵衛」と記しているが、現地で道標を実見すると「田上」と「治兵衛」の間には判読困難な2文字が存在している。龍門村八幡神社棟札の記述を踏まえて、この判読困難な2文字を現地で再検討したところ、私見では「森村」と読んでよいものと考えている。なお、同じ道標に名前が刻まれている「京白川 太郎右衛門」は、現在のところ他に作例が知られておらず、いかなる存在であったのか不明である。
- (17) 中川泉三『近江栗太郡志』巻四 滋賀県栗太郡役所 1926

編集後記

今回の紀要は、出土資料の紹介をはじめ、遺跡および遺構の新たな評価や再検討など多彩な内容となっています。これらには、近江の独自性が垣間見えるとともに、幅広い交流の歴史が反映されているようです。

本書が文化財の保護のため、広く活用されることを心より願っています。

(編集担当)

平成21年(2009年)3月

紀 要 第22号

編集・発行 財団法人滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel.077-548-9780(代)
<http://www.shiga-bunkazai.jp/>
E-mail: mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本 (株)同朋舎